亡き子を偲びて

三鷹市　高橋良子

満洲もおもしろからむ父の言ひしに
　心定めていでたちにけり
かりそめの門出の如くいでゆきて
　永久(トワ)に帰らぬ我が子なりしか
夕映え山の彼方をそめし頃
　吾子のせし汽車はゆきて帰らず
十余年育みし故郷(サト)に帰り来て
　あはれ今この歎きせむとは
山も河もありし昔のままなれど
　その面影は求むすべなし
ひたすらに励みしはあだの今にして
　哀れシベリアの露と消えぬる
二千里の彼方に行きし汝なれど
　魂よとく来て春にあへかし
おだまきの糸くり返す繰(ク)り言に
　慰め求むわがおろかさよ
かなしくもうつし世の縁(エニシ)うすかりき
　安けく生きよ母の心よ
はらからとひとつ灯(トモシ)下に笑まひしを
　ひとり異郷の土となりしか
汝が果てのきはまでも固く抱きしとふ
　家族(ウカラ)うつしゑ今日帰り来ぬ
さようならその一言を永久に
　此の世の縁(エニシ)たちにけるかや
四年(ヨトセ)すぎぬ師走二十日の朝なりき
　永久(トワ)の別れと知らで送りし
もゝちとせ待つ甲斐なしと思へども
　何とはなしに心またるる
おくつきに吾子の愛でにし花させば
　奇しくも根づき芽をふきてけり
靖国の子なりき我は知らずして

心なの育て今ぞ悔ゆるも
シベリアの墓土にまで泌みよかし
見送りし朝のあとをとどめて
この鉄路(ミチ)を走りゆく時故郷(サト)の家を
車窓(マド)にながめつ別れ告げむ

帰り来(ク)と期して悸みて待ちしかば
戦友(トモ)の便りに胸ぞつぶれし

（註）故郷は冨士駅

靖国神社に参拝

亡き吾子が詣でし足跡をふまむとて
我参道をヂグザグに行く
数多きことなればとなのたまひそ
人それぞれの悲しみける
元(モト)の家の樹々眺むればゆきし子の
育ちしその日目に浮ぶなり
かゝる折はかくありけりと事毎に
浮ぶ面影なつかしき哉
何ならむ焼のよきてふ香炉に
心ひかれぬる幼時の篤忠
圖らじなその香炉に今はしも
手向けらるゝ身となり果てむとは
知らされし頃は形も在りにしに
五年(イツトシ)今は如何(イカニ)なりけむ
これやこれ吾子がかたみの破れズボン
繕ひし日の幸をぞ思ふ
おろかなれどされどかなし母吾れは
追ひ憶ふを唯なぐさめとして
供へつる清茄子にさへむせぶてふ
亡友(トモ)の母御(ハハゴ)のみこゝろ憶ふ
御歌を拝して
頂きし名をば我身の楯として
尽さむものとひた励みしか
ねもごろの御歌たまひて亡き吾子の
広野の土にむせび伏すらむ

三十余年経ちし頃の詠

一万日に垂とせり一日(ヒトヒ)をも

想はですぎし日とてなかりけり